

イスラーム・ジェンダー学科研 2020 年度『巣ごもり読書会』

イベント名：「愛の労働あるいは依存とケアの正義論」

日 時：2021 年 3 月 12 日（金）13:30-14:30

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

語り手：澁谷智子氏（成蹊大学）、嶺崎寛子氏（成蹊大学）

嶺崎：こんにちは。私は、エジプトと在日パキスタン人の研究をしています。専門は文化人類学とジェンダーです。「巣ごもり読書会」はイスラーム・ジェンダー科研の企画ですが、私は中東研究者や文化人類学者としてこの本に感銘を受けたのではなく、ジェンダー研究者としてすごく面白いと思いました。また、私は第2波フェミニズムの「個人的なことは政治的である」という金言をととても大事にしてきました。自分の個人的な体験をどうやって理論化するのか、ということに対して、この本がとても面白い示唆をくれたので、これについて是非皆さんと読書会をしたいと思います。一緒にやったださるパートナーとして澁谷先生にお声がけしたところ、受けてくださいましたので今日このように開催する運びとなりました。

澁谷：こんにちは、澁谷智子と申します。多くの方にとりまして、多分「はじめまして」になるのではないかと思います。「私でいいのでしょうか」というのが最初の率直な感想で、「私、イスラーム知らないかも」というようなところが、少し気にはなっております。と言いますのも、先ほど少し暴露したのですが、新婚旅行で一回だけパキスタンに行ったことがあり、その時はとてもカルチャーショックでした。たまたま夫の研究繋がり、日本から一斉強制送還されてしまった不法就労外国人労働者のパキスタン人の方々のところに行きました。その方々はいきなり強制送還されてしまったので、本当なら故郷に錦を飾るはずで、色々なお土産などを持って帰るはずでしたのに、何も無しに帰ってきてしまったんです。そのため、夫と私は、彼らが「日本ではこういう人たちと関わっていたんだ」と親戚に見せる対象となり、本当に1日6軒くらい回られるような、凄く大変な思いをしていました。私は文脈が全然わからなかったのに、「女の人と男の人は部屋別だから」といきなり女部屋に一人入る形になり、「私は何を話せばいいのでしょうか」みたいな状態になったりしたこともあって。「結構文化違うよな」と感じた経験がありましたので、今日は、「私は何も知らないぞ」というような、ちょっと怯えを持ちながらの参加になります。

ただ、キティについては書評を書いたことがあります。私はケアの問題ということをかなり本格的に考えたいと思い、特に社会学の立場からやってまいりました。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

嶺崎：ありがとうございます。澁谷先生はヤングケアラーのご研究をされていますが、それだけではなく、コードと呼ばれる、耳の聞こえない親の下に生まれた、聞こえる子ども達のご研究もされています。

本日は、私のほうから本の概要含めお話させていただき、その後澁谷先生にお話をいただいてから質疑応答に入ります。よろしくお願いします。

嶺崎：『愛の労働 あるいは依存とケアの正義論』の原著 *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency* は 1999 年に出版されました。日本語と英語でタイトルはかなり異なりますが、いい日本語タイトルだな、と何回見ても思います。

著者のエヴァ・フェダー・キティさんは、西洋哲学やフェミニスト倫理学、社会思想が専門の方です。本にはニューヨーク州立大学のストーニー・ブルック校哲学科教授、と記載がありますが 2021 年 3 月現

在、何をしているかまでは調べきれておりません。

ロールズの『正義論』という凄く有名な本がありますが、この本に対する批判の書、とっていただければ良いかと思います。ロールズの『正義論』を依存とケアの視座から批判的に論じて、依存を包摂する新しい平等理論を練り上げることを目指した本です。大変哲学らしいと思いますが、古代ギリシャにルーツがあるような、西洋哲学の古典的な公私二元論や、そもそもの個の平等を前提とした個人の平等、個人というものに何が想定されているのか、などを批判的に考えている本です。

日本に「哲学とフェミニズム」や「哲学とジェンダー研究」などの専門家はあまりいないように見受けられますが、アメリカにはこうした「哲学とフェミニズム」の研究者は沢山います。ジュディス・バトラーや本書のキティなどがそうです。哲学ですから、どういう社会であるべきか、というような「理想の社会の追求」に重きが置いてあるのではとキティを読んでいて感じます。書評も結構たくさんあり、2020年になってもまだキティの著作に関する本が出ていたりするので、そこそこ関心を持たれていると思います。

ケアについては、マーサ・ファインマン『家族、積みすぎた方舟』があります。キティを翻訳した岡野先生なども、その後ずっとケアの問題を論じています。色々なところで本を書かれていますが、やはり岡野先生らの原点になったのはキティの翻訳ではないかと思います。キティが来日した際の対談集も出版されていますので、興味のある方はそちらもご覧ください。

本書は3部構成になっています。第Ⅰ部と第Ⅱ部は結構理論的ですが、第Ⅲ部は個人的な経験をもとに、なぜ依存とケアの問題に取り組むようになったか、というまさに「個人的なことは政治的である」を述べています。

本の構成

序章

第Ⅰ部 愛の労働—依存は何を要請しているのか

1章 依存の平等の関係

2章 脆弱性と依存関係の道德

第Ⅱ部 政治的リベラリズムと人間の依存

3章 平等の前提

4章 社会的協働の恩恵と負担

第Ⅲ部 みな誰かお母さんの子どもである

5章 政策とケアの公的倫理

6章 「私のやり方じゃなくて、あなたのやり方でやればいい。セーシャ。ゆっくりとね。」

7章 違いのある子どもへの母的思考

・・・依存は人類に不可欠である＝依存者をケアするケア労働者も不可欠であることを指摘。依存者とケア労働者(本文中では「依存労働者」)の利益になる形で依存労働を公的にシェアする必要を説く。

6章のタイトルにあるセーシャさんとはキティの知的障害を持つ娘さんのことです。彼女は知的障害だけではなく身体障害もお持ちで、24時間介護が必要です。ずっと介護が必要だけれど、そこにいて嬉しくて、愛しくて、大事、というようなお子さんとの暮らしを、どう理論化したらいいだろう。けれども、この子のケアをしていたら自分のキャリアが作れない、というところから出発したことがよく分かる章です。第Ⅲ部は第Ⅰ部・第Ⅱ部と比べて少し毛色が異なりますがどれもとても面白いです。

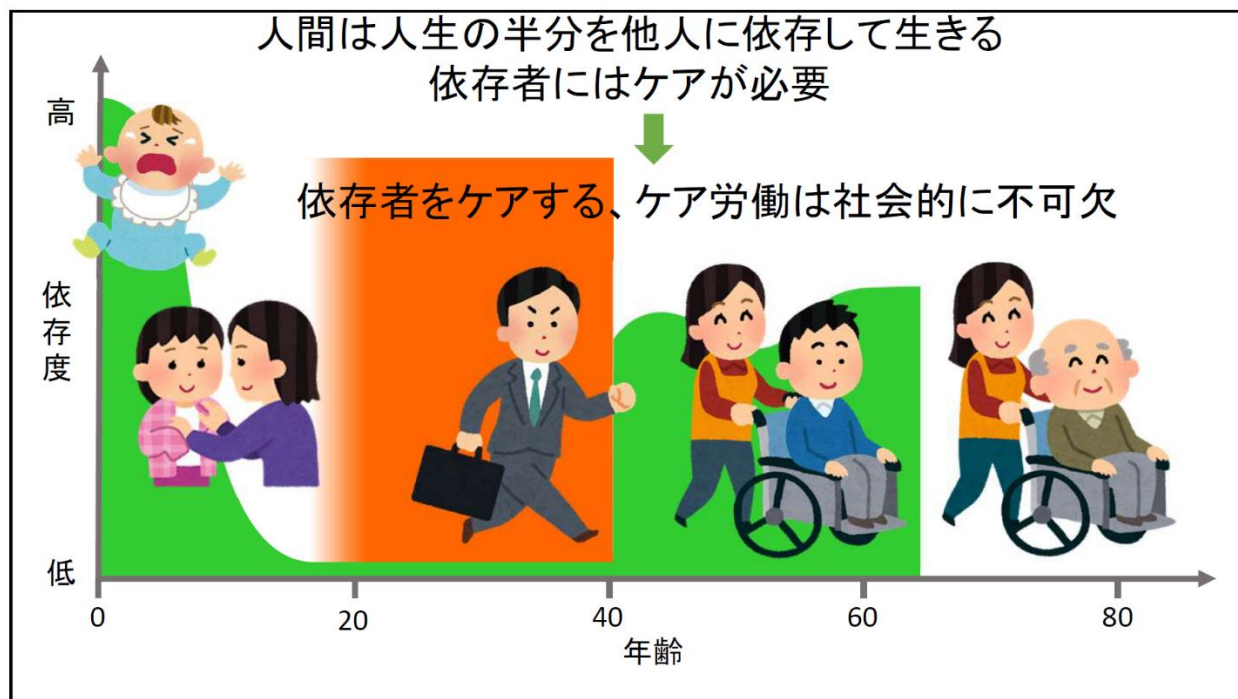
本書では結局のところ「誰かに依存する、ケアされなければならないというのは、人間にとって本当に不可欠」ということを論じています。生まれてすぐの無力な赤ちゃんなどが一番わかりやすいですが、ケアされないで生き延びられる人はいません。人類にとって依存は不可欠である、ということはつまり、依存者をケアするケア労働者も絶対に必要である、ということを描いています。そして「依存者とケア労働者——私は今回ケア労働する人という意味で「ケア労働者」と使っていますが、本書ではずっと「依存労働者」と呼ばれています。依存する人をケアする人、という意味で「依存労働者」です。ですが日本語としては少し分かりにくいと思ったので、発表の中では「ケア労働者」と読み替えさせていただきます——の利益になる形で、依存労働を公的にシェアする」必要性を説いた本、といえます。彼女はロールズを徹底して批判しました。それは彼の影響力の強さだけではなく、彼の踏まえる西洋的な「自立した個人」という想定フィクション性を訴えているのだと思います。

では、「自立」した個とは何か。「あなたは自立していると思いますか？」と大学の授業で聞くと大抵大学生は「自立していないと思います、まだまだだと思います」と言います。理由を尋ねると、親元に住んでいる子は「洗濯も全部してもらっているし、自分は学校に行くだけだから」、「でもバイトはしているから、自分のお小遣いは賄っているかな」などと言います。一人暮らしをしている子であれば、「仕送りももらっているし、経済的にはまだ全然自立していないから、私は一人前ではありません」などと答えます。日本の学生の考える「自立」や「一人前」は、経済的な自立の比重が高いといつも思います。

私は生涯学習センターでもキティの話をしますが、そういうところで話す方も、自分の自立については「うーん、経済的な自立が…」などとおっしゃいます。ですが、主婦は「自立」していないのかというと、そうとも言えない。中東諸国のように一人暮らしが当然ではない社会における「自立」って一体何だろうかと考えますし、この自立という話をすると、高度産業社会の日本の「自立」というのは賃労働を極端に重視するな、と強く思います。でもこの「自立」した個という前提は実は全然「アタリマエ」ではないんです。このフィクション性があまり見えていない。この「アタリマエ」ではない「自立」した個だけが社会の構成員とみなされるような現実があつて、そのように「自立」していない人は、いわゆる二流品みたいに思われています。しかし、それはそもそも公私二言論のモデル化の前提がおかしいのではないか、というのがキティの主張の一つです。

本書では、ロールズ『正義論』の人格の「モデル構造」についても述べています。ロールズの「自立した、公に参加する個人」とは、全ての当事者を同等に、つまり互いに対等な立場にあるように設定しており、「全ての市民は全生涯を通じて十分に社会的協調が可能な成員である」という前提に立っています。ここでは、全面的かつ能動的に社会に参加し、生涯を通じて直接的・間接的に互いに協力し合う人々の関係こそが、正義の通底的な問題である、という話をしています、しかし、それだと「自立した個人」が前提条件になっていて、そもそもその前提条件にまだとり着けない人もいて、人間の依存という事実を看過しすぎではないか、というのがキティの主張です。

自立と考えた時、日本人風に（あるいは学生風に）経済的自立という話だけにすると、実は自立している時期というのは人生の半分くらいです。0歳で生まれて80歳過ぎで亡くなるとした場合、18歳あるいは22歳くらいから定年60歳あるいは65歳くらいまで働くとしても、80歳ちょっと生きれば、経済的に自分が自立している時期は恐ろしいことに大体人生の半分くらいです。



それ以外の時期はどうしているか、というと、経済的自立だけではなくて、色々な自分の身辺自立ができません。特に生まれたばかりの赤ちゃんの場合は依存度がすごく高く、誰かにケアされないと死んでしまう、というレベルです。成長と共に依存度は徐々に下がりますが、それでも子供のうちは誰かに衣食住の面倒を見てもらわなければならない、自立しているとしても、健康寿命を過ぎれば、亡くなる時まで何らかの形で誰かに依存せざるを得ない、という状況があります。あるいは、途中で事故や病気などのためにもっと長く人生を依存する形で暮らすこともあります。

人生のおよそ半分くらいを他人に依存して生きるとすれば、依存者に対してケアが必要です。つまり、依存者をケアするケア労働者が必要になってきます。これは社会的に不可欠であるのに、この労働については社会的にはあまり重視されておらず、見えてこないことがまず問題である、とまとめてあります。また、実は自立しているように見えている部分でも、日本の昭和のサラリーマンの男性など、実は身辺自立ができていないことが多いです。お風呂や洗濯、食事の支度など、自分が明日労働者として元気になるために今、労働者としての自分をケアする——これは狭義の再生産労働にあたります——、衣食住などを整えることを、実は自分ではやってきていないわけです。奥さんがやってきた、という形であった以上、実は自立していると思っている時期でも、身辺自立は実はしていないという人も、意外にいると思います。あとケア労働というのは、凄くジェンダー化されています。

ロールズの議論の中で、依存せざるを得ない依存者と、依存者をケアする人＝ケア労働者の存在は、今まで不可視化されてきたのではないかとキティは言います。人間はキノコではないので、勝手に生えてそこにいるわけではなく、ケアされてこそ生存できるし、ケアされたからこそ、自立した個として成長してそこにいることができるわけです。でもそのようなケア労働は、ジェンダー化されているだけではなく、基本的には公的領域よりも私的領域に属するとされ、私的な関心に属する事柄だと考えられてきました。依存者は誰かに依存しないと生きられない、脆弱性を抱えた存在であり、絶対にケア労働者を必要とします。これは依存の程度によって濃淡があっても、基本的にはケア労働者が必要です。

ケア労働者は、自分のニーズよりも依存者のニーズを優先しなければならないゆえに、社会的脆弱性を

帯びます。しかも、ケア労働者であることに関してしばしば「自分の選択の結果だ」などと言われます。しかし、人間というのは、自分が第一義的に面倒を見る人で他に代わりがない時に、自分がケアを放棄したら死ぬ存在をケアしないという選択肢を実際は持っているものでしょうか。これを「入子状の依存」といい、「自分のニーズや希望を求めることができることこそが、人々の共同により生み出された財を得る自由競争に参入するのに必要とされるものなのだ」とキティは言います。そして、「このハンディキャップが彼女の二次的依存、すなわち稼ぎ手への依存を作り出す」とまとめています。つまり依存者とケア労働者の依存ゆえに、あるいは依存者のニーズに合わせた働き方ゆえに、ケア労働者は社会の中で周辺化されていきます。

このベタな公私二元論の中で、ケアは「私」の領域（家庭で行うべきもの）と言われているため、こちらでケア労働を行う人が「公」の部分に参入していくことは難しい。しかし社会参画というと、自立すること、この「公」に入っていくこと、と思われている方が多いため、実はこのケア労働を担っていると、ケア労働者も依存している人もなかなか「公」に参画できない、と理解すれば良いかと思います。

では女性が「私」空間から「公」に出られないのはなぜか。一番わかりやすい例として、新生児の世話の話をします。赤ちゃんの1日が細切れだとすると、それに対して世話をする人の1日も、赤ちゃんの1日に合わせて細切れになっていく。そしてこの自分のニーズ、とりあえずトイレに行くなどではできるかもしれませんが、ちょっと遊びに行きたいとか、3時間ひとりになりたいたか、なかなかできない。赤ちゃんが泣くたびにお世話をし、赤ちゃんの生活リズムに合わせなければならず、どんどん自分の時間がなくなって、疲れてしまう、となるわけです。

労働者は依存者のニーズに応えることを最優先にして、それに合わせて生活しなければならない。それをキティは「自らの利害を依存者の利害に従属させなければならない」と書いています。また、今の例は1人の赤ちゃんですけれども、他に元気なちびっ子がいる場合はもっと大変です。赤ちゃんのニーズにも応えつつ、ちびっ子のニーズにも応えるみたいになってしまうと、ケア労働者がキャパオーバーを起こします。

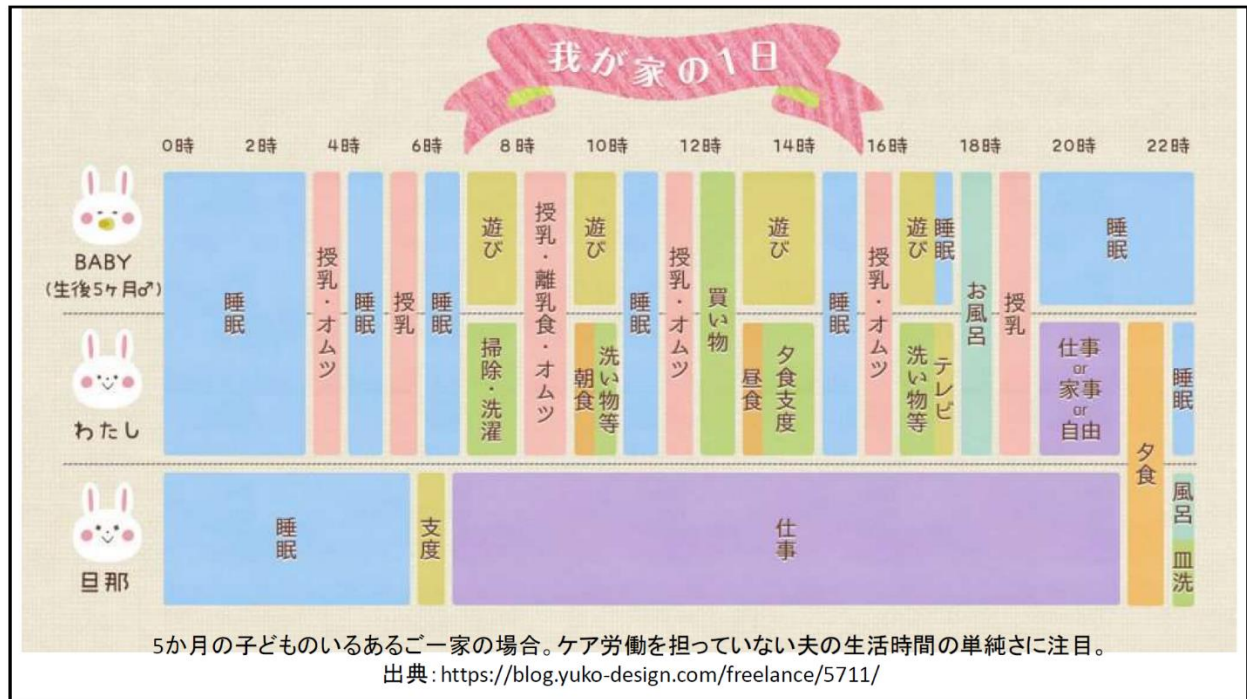
この時、後回しになっているケア労働者のニーズを満たす人がまた別に必要であることを、キティは言っています。これは、ケアする人をケアする人です。「ドゥーリア」と彼女は呼びます。これは「ドーラ」から来ていて、出産直後の新生児のお世話をするお母さんは自分もまだ回復途中で大変なので、お母さんをお世話するために実家の母などが召喚されてきたりするわけですが、そのイメージで「ドゥーリア」と名付けています。つまり、ケア労働者もケアされないといけない、というわけです。日本の場合、ケアする人をケアする人＝ドゥーリアがいない時、ワンオペ育児などの大変な思いをすることになります。

赤ちゃんは大きくなりますから、だんだん比重が下がってくるかとも思えます。しかし実はそんなこともなく、赤ちゃんを一番に面倒見る立場（primary carer：第1番の優先ケア労働者）になると、なかなか外で働くことは難しいです。つまり、依存者のニーズに合わせなければいけないために、ケア労働と賃労働の相性が悪いということです。「公」の領域にいる間に、依存者に何かがあったらどうなるか、ということになります。

例えばここで、ケアする人をケアする人＝ドゥーリアが確保できて、一時的に依存者と離れることができるようになったケア労働者が働き出したとします。それでも、普段は良くても、例えばこの赤ちゃんに発熱など何らかのことがあると、「公」にいるはずの第一次世話係、つまりケア労働者に真っ先に電話がかかり、「じゃあ戻ります」みたいなことになって、「私」の領域に引っ張られてしまう。つまり、依存者のニーズに自分のニーズに従属させなければいけない、ということがあり、これは日本で言えば「パートタイムでないと働けない」ということの意味です。

ここで非対称性があるって、依存者がケア労働者なしに生きられない、ということがあります。それは悪

いことばかりではなく、ケアというのは人間がやることで、人間社会の中であることです。そこには絆や愛、かけがえのなさなどが良い、という気持ちも生まれてきます。しかし、ケア労働者が依存者のニーズを第一に考えるがゆえに、労働者としては周縁化されて、社会的にはやはり不可視化されてしまう。依存者とケア労働者は、二人して弱い立場に置かれる。そして「公」に参入できないので、そこで意見表明もできず、社会的にもその人たちのニーズが知られない、ということになります。



これはネットで拾ってきた、5ヶ月の子供がいる、あるご一家の場合です。お母さんと赤ちゃんの生活リズムがすごく細切れであるのに比べると、ケア労働をやっていない旦那さんの生活の単純さたるや、という印象を受けます。旦那さんがやっている再生産労働は、皿を洗うだけかもしれません。すると、自分のケア労働はほぼ何もやっていないのでは、と思います。しかし日本の場合は、旦那さんが長時間労働をしていて、家庭に参画できない、という状況が続いています。

今まで日本で社会的に評価されてきたのは「公」の場所での活躍でした。一方、ある種のフェミニズムなど、「私」空間も評価してほしい、こっちの仕事だって偉大だし大変です、素晴らしいことです、などと言っていて、こちらを評価しなさい、と主張するフェミニズム運動の一派もあります。

あとベタなのは、森喜朗さんの発言で「皆さん弁えておられて」とおっしゃったのは、「本来は私的な領域にいるはずの女性が、公の場に何かの弾みで出てきても、弁えて黙っておれ」ということだと思います。それについては、3月2日の日経新聞にIIJの会長の鈴木幸一さんという方が「重要な仕事、家事を忘れている」と言っていました。要は私的領域の家事を聖化して持ち上げることによって、私的領域での仕事にも十二分に価値がある。だから女性たちはそこにいてください、という発言なのです。そうした発言も、公私を分け、「公の場は男性の場所、女性の場所は私の場所。だけどそこで活躍できているのだからいいじゃないか」みたいな意見、つまり私的領域で行われる女性の無賃労働やケア労働を聖化することによって女性を封じ込めるような典型例だと思いました。実際のところIIJの会長の鈴木幸一さんは次のように言いました。「家事は、男が到達できない人格を作ることでも確かである。本当に子供を育て未来を

作ることができるのは、そんな女性かもしれない、と思うことがあるのだ。何事も一般化する話ではない。我が身を振り返ると毎日毎日沢山の時間を費やして家事に集中していた時代の女性には凄みがあると、母親の料理や洗濯などを思い出す。男女を問わず、にわか知識で言葉を挟むような審議会の委員に指名されるより、女性が昔ながらの主婦業を徹底して追及した方が難しい仕事だし、人間としての価値も高いし、日本の将来にとってもはるかに重要なことではないのか、と。そのことを思うのだが」。これこそ、まさにベタに私的領域を聖化するやり方であると思います。

こうしたやり方にはデメリットとメリットがあります。公私二元論を脱構築できない、というのが第一のデメリットです。また、性別役割分業そのものをなかなか批判しにくいこともあります。他方メリットは——日本の社会ではあまりメリットではありませんが——エジプトやパキスタンなどの女性たちを見ると、「ここにいる私の何が悪いわけ」といった自尊心があります。私的領域でケア労働をするということについて、「神様がこれをやれって言ったもん」という確信と勢いのある自己肯定感があるわけです。この自己肯定感は、すなわちケア労働者の二次的依存、稼ぎ手への依存を、ケア労働者本人と稼ぎ手がどう捉えるか、という問題であるとも思いました。ケア労働者と稼ぎ手は対等で、ケア労働者はケアをしているのだから「私はこれでいいのです」という、強い確信みたいなものをパキスタンやエジプトなどでは感じます。それに比べると、日本人はやはり賃労働にすごく価値を置いていると思います。

キティは「依存とケアの問題を包摂した社会のしくみが必要で、これ全部を丸ごと評価するような新しい思想が必要だ」と言います。公の場だけを社会活躍とするのではなく、公私どちらも含み、さらにケア労働を私的な領域から公的な領域へ出して、そこでみんなでシェアする方法を考えるべきである。そして、公平なケアの分配という視点を持つ新たな平等を模索するべきである、と主張しています。

本書では次のように現状を認識しています。現状では、依存労働、ケア労働はジェンダー化されており、女性が圧倒的にそこに携わっています。依存労働は不可視化されています。依存者をケアする人々の特別な立場は、政治的領域、すなわち、そこに参加する当事者たちが平等とみなされる領域では不可視となっている、とキティは指摘します。そしてケア労働には、奴隷の場合と同じく自由に対する制約があります。例えば、自分のニーズがあっても、そこに痰の吸引をしなければ死んでしまうような子供がいたら、2時間その子を置いて外に出ることはその子供を窒息死させることに近い。そうすると、なかなか自分の自由がきかないのが事実です。これを読んだ時に私が思い出したのは、某イスラーム研究者の方がうちに1人目の子が生まれた時に会いにきてくれて、「新生児だと、親は奴隷になっちゃいますから。もうちょっと小学生くらいになると、だんだん自由になってきて、農奴くらいには出世できますから、頑張ってください」と言われたことです。新生児の世話をしている親を奴隷だと言ったことが、すごく印象に残りました。

また、ケア労働というのは、自然で、あとは尊いものとして、「母だけができることだ」という形で聖化され、情緒性、愛情などのイデオロギーに糊塗されて正当化されてしまいます。先ほど紹介した、日経新聞での鈴木幸一さんの発言などは本当に典型例だと思います。また、実はケア労働者には稼ぎ手よりも自らの役割から脱出する機会が得にくい主観的・客観的要素があります。その依存者を放っておけるのか、というのが倫理的にも道徳的にもなかなか難しい問題で、嫌なら「もうやめてやる」とは、なかなかないものです。だからこそ、ケア労働者の稼ぎ手に対する二次的依存が生じている。でも、これは二次的依存であって、ケア労働というものの特殊性によって生じているものです。それでもケア労働者を社会のお荷物のように扱い、「あの子供がいるから、よく電話がかかってきて働けないよね」という形で、賃労働からはどうしても排除されてしまう。排除されるゆえに、稼ぎ手に対する依存が生じている、というような状態が今ある、ということをキティは言っています。ではキティは、その先にどうあるべきと思っているのでしょうか。

ドゥーリアの理論、すなわち困っている人々の面倒を見ているゆえに貧困化する人々もまたケアされるようなサービスが行き渡る社会にしたい、ということを行っています。また、ドゥーリアの理念を公的な領域へ拡大すべきで、ケア提供者の福祉に注意を払う方法を考えていきたいと述べています。依存労働をまずは可視化し、それを思考に組み込んで行くべし、と。また、依存労働のより公平な分配——これは私的領域からの脱却——目指した方がいいのではないかと主張しています。キティは、依存を「コスト」として見ることで、例外と考えることに対する断固たる「NO」を突き付けているのだと思います。

「セーシャがくれたもの—個人的な語り」として、彼女が第Ⅲ部で娘のセーシャさんとの話を語っています。ここはぜひ読んでみてください。キティに倣って個人的な語りをしますと、私は高1の時に母を事故で亡くし、以来、父子家庭で小6の妹をケアしてきました。大変でしたが、それで得たものもありました。例えば、文化人類学者としてエジプトでフィールドに行って、実際にそこのお宅に住み込みで住まわせてもらった時に、家での労働経験があるというのは「お母さん、これ、片付けるね」みたいな感じですぐに動けるということにつながり、お母さんにはすごく可愛がられました。フィールドで自分の場所を作る時に大変便利だったという思いはあります。

例えば高橋留美子の漫画『らんま 1/2』には、父子家庭の三姉妹の一番年上で、高校を卒業した「かすみお姉ちゃん」が出てきます。この人は、家でずっとケア労働をしています。彼女は、下の妹二人や居候を含めた家族6人のご飯を作るなど、主婦としての労働をずっと行っています。かすみお姉ちゃんは基本的に家族に関心を持たれていません。家の主婦業をしているかぎりにおいては、かすみお姉ちゃんは何をしてもいいのです。しかしかすみお姉ちゃんのキャリアや今後の将来のことなどは、家族の誰一人として考えておらず、「接骨院の人と結婚したらいいのでは」くらいにしか思われていません。私の家族も、かすみお姉ちゃんくらいにしか私のことを考えていなかったらと思うことがあります。そこには「ケアさえしてくればあとは何でもいい」という眼差しがあり、一方でケアをする側には、なまじ依存者との強い絆があるからこそ、そこから降りるのも難しいということがあります。今、私は親業をやっていますが、親業よりもヤングケアラーの時の方が大変だった印象があります。

在日パキスタン人の2世は、親の日本語能力は自分たちよりも低いです。この場合、ある時点で自分が親への通訳などで親を助けるようになるので、本国にいるパキスタン人の親子の典型的な関係性よりもより「対等」、あるいは親に対しても自分の意見が自由に言えるような新しい、移民2世ならではの親子関係が出来ているように思えます。これはキティも指摘しているとおりに、ある種の依存というものが権力にもなりうるということです。ケア労働者は依存者に対して権力を行使する存在でもある、というところがまた難しいところだと思います。

また、ホックシールドが言うところの「グローバル・ケア・チェーンズ」というものがあります。つまり、ケアというのはどうしても相対的な弱者に流れていく、という傾向があるのです。このケアの連鎖の話や、性別役割分業が何のためにあるのか。ある文化人類学者が「これは結婚を推進するためにある。みんなが一人で身辺自立などを全部できていれば、カップルになる必要がない」と言っていました。カップルになる必要がない、確かにそうです。そのような性別役割分業がある時に、実はロマンティック・ラブ・イデオロギーと性別役割分業がセットになる、というのは実は結構なリスクだと思っています。

と申しますのも、私の知り合いのパキスタン人のお家の場合、70代のお父様だけがパキスタンに残っていて、子供世代はみんな移民して、カナダや日本など色々なところに住んでいます。お父様は要介護ですが、お父様の面倒をずっと見てくださった後妻の方がこの間亡くなりました。面倒を見る人がいないけれども皆さんパキスタンには帰らないので、どうなったかということ、新しく妻として介護してくださる方——その人もやはり生活に困っている未亡人の女性——と結婚されたそうです。このように役割分業が社会

規範して成り立っていて、そこに「好き」や「愛」などが入ってこない社会では、そこで「じゃあ結婚させよう」みたいな形になるわけです。そういうものがないと、ケア労働というものが難しくなります。一方日本の実父は再婚していないので、一人暮らしの身辺自立できない飲んだくれのやもめを誰がどうケアするか、というのが私の今のリアルな問題なわけですが、子どもとしてはロマンティック・ラブ・イデオロギーとかどうでもいいから、実父のケア労働をしてくれる人はいた方が良いでしょう。日本とパキスタン、ロマンティック・ラブ・イデオロギーの有無によって高齢やもめ男性に対する選択肢が変わってくるのが如実にわかって面白かった例です。ただこれは両方の解決策がそれぞれリスクを含んでいるのであって、別に私はロマンティック・ラブ・イデオロギーがなくて性別役割分業がいい、ということが言いたいわけではないのです。ここを公でみんなでシェアすべきだ、というのがキティの主張です。本書は、ケア労働の問題、依存の問題、そしてそこに取り巻かれるグローバル化の問題、そしてジェンダーの問題、そんなことを色々考えさせられる、面白い本だと思っています。

嶺崎： 引き続きまして、澁谷先生にお話いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

澁谷： よろしくお願ひいたします。私の方からは3つくらいのお話をさせていただこうと思います。1つ目は、今、嶺崎先生がおっしゃった中でも、在日パキスタン人2世の経験する親の依存というところです。移民の2世は、やはりホスト社会で生活しているときに、その社会の言語を親よりも上手に吸収していくところがあり、結果として通訳を担うことがあります。私は、修士論文も博士論文も耳の聞こえない親をもつ聞こえる子ども達を取り上げました。その子どもたちがやっていたこととして、通訳の業務がかなりありました。必ずしも手話通訳ではなく、親が唇を読みやすい言葉に、口を大きく開けて言い直したり、言葉の説明をしたりということも入ってきます。あるいは文章を作って、それを親に大人の字で連絡帳に書いてもらうなど行っていました。ですので、私にとっては、ある意味子どもの通訳というところが、ヤングケアラーの研究よりも先にありました。

なぜ子どもの頃の通訳が大変なのか。それは、普通は大人がやると想定されていることや、大人の会話の内容を、子どもの立場で伝えなくてはならないからです。また、伝える際に理解や情報の取捨選択、判断などが入ってくる時に、すごく難しい局面があります。例えば、親が駐車場を賃貸で借りる際、子どもが通訳に借り出される時。その子家では駐車場のことを「車庫」と言っていたそうで、「駐車場？何だろう、この言葉」と思いながらその子が訳したやり方が、「注射・場」でした。つまり注射するところ、と訳したんですね。このように、子どもの理解で親の言葉を通訳する難しさがあります。また、例えば銀行で口座番号などと言われた時に、子どもにとっては「それ、何？」というような世界ですし、あと親が借金をして借金の会社から電話がかかってきた時に、「親は耳が聞こえませんか」などと言えば、「何だよ」みたいな感じでガーっと言われるのを聞かなくてはいけません。「利子」という言葉が出てくる時、「利子って何だろう」と思って、「リシ」と指文字で音だけでも親に伝えようとするなど、状況を分からずに伝えなくてはいけない大変さ、あるいは他の人の感情を子どもなのに受け止めなくてはいけなくて、しかもそれを伝えなくてはいけないしんどさなど、色々そういうところがあります。

そうした通訳は、子どもができる言語の面に親が依存してくる、という側面もあるのですが、子どもの側からすると、なぜ情報を左右するのが自分なのだろう、というように、親に対する敬意を持ちにくくなってしまふところもあるため、親子関係に影響を与える部分があります。通訳するということは権力行使する側でもある、と嶺崎先生がおっしゃったのは、本当にそうだと思います。実をいうと、これが私の研究の出発点にあります。

そこから、子どもがやることと大人がやることの境界とは何かということに興味を持ち、その時に会ったのが「ヤングケアラー」という概念でした。「ヤングケアラー」というのは、本来世話されるであろうと想定されている子どもの側が、その年齢にしてはかなり重い責任と作業を担って、病気や障害、あるいは幼さなどのためにケアを必要とする家族の面倒を見る側になる子のことを言います。ヤングケアラーを見ていると、どうしても「お手伝い」という文脈で捉えられて、「昔は日本も貧しかったから、そういうのをみんなやっていた」と捉えられます。しかし子どもは、社会の中で同世代との比較の中で生きていると思います。もちろん、日本だって『おしん』みたいな時代があり、子どもは奉公に出されたり、あるいは家のことをやったりするのが当たり前、という時代があったかもしれません。しかし、やはり高度経済成長期を経ると、家にお母さんがいて、お母さんが家のことをやってくれて、お父さんが主な稼ぎ手となり、子どもは自分の経験を広げていくことや知識を広げていくことに専念してよい、というイメージがあります。

子どもは自分のことに時間を使えるはず、ということを前提としているので、色々な学校教育や、運動会の時などで、例えば子どもが自分でお弁当を作って運動会に出る、というようなことは、あまり想定されていません。お母さんがお弁当を作ってくれて、場合によってはお父さんが場所取りに来るのかもしれませんが、そのようにして子どもは競技だけすればいい、と思われています。その中で、例えばお母さんが病気でお弁当を作れる状況ではない、自分は小学校6年生で弟が小学校3年生で、弟の分のお弁当を作らなくてはいけないがどうしてもいかにわからず時間ばかりかかってしまい、弟にはとりあえずお弁当を持たせてあげたけど自分は遅刻して出るはずだった競技に間に合わなかった、というエピソードなども聞きます。このとき、その子どもには「なぜ自分だけ」という苦しさがあります。他の子との比較の中で、なぜ自分はそれができないのか、時間的にもかけるエネルギー的にも、それから誰かを頼っていいのか、などの葛藤を抱えています。

そのような心理面においても、その子たちは全部自分で抱え込まなくてはなりません。その結果、もしかしたら他の子達が当たり前でできている、とその子から見えるものが、自分はできない、という時のしんどさや惨めさ、また「自分の努力が足りないのか、でも頑張っているつもりだけれども」という葛藤などを、子どもの立場に立って誰も聞いてくれる人はいないと思われまます。やはり、賃労働と家でのケアの労働をあまりに分けて考えきた社会の歪みのようなものが、そういうところに凄く出ているのではないかと思います。これが2つ目の話になります。

3つ目。今回4年ぶりくらいにキティの本を読み直した時に、以前の自分では気が付かなかったところに気付きました。例えば嶺崎先生の言葉に何度も出てきた「ドゥーリア」という概念です。ドゥーリアというのは、赤ちゃんを産んで間もないお母さんが、自分のことをするのも大変な時に、お母さんのためのご飯を作ってもらったり、世話をしてもらおうという関係ですが——今流の言葉で言うと「ケアする人のケア」という言葉でいいと思います——「待てよ、これ」と思ったのです。例えば昭和の日本や、イスラームなど、性別役割分業がかなりはっきりしている社会において、男の人たちが「自分のやっていることはドゥーリアだよ」と言う可能性もあると思ったのです。つまり、ケアに価値を見出して、ケアする人を支えるために、自分は経済的なところで「支えて」いる、という論理も成り立つのではないかと、思いました。

では、その何が問題なのかというと、やはり経済力を握っていることと、色々な選択をするときの判断がセットになる、ということだと思います。どうしても必要なものにお金を出す、という時には、おそらく稼ぎ手とケアの担い手の方でも合意が取れると思いますが、「えー、そんなことにお金使うの？それって必要？」みたいなものにお金をどの程度出せるか、という場合が出てくると思います。自分で稼いだお金ならば、趣味の本に使おうが、美容院に行つて髪を染める、ということでもいいかもしれません。しかし人が稼いだお金は真面目に使わなければいけない、みたいなことになった時に、選択の幅を自分

で凄く狭めていくところがあるのではないか、と思いました。

私が目指したいのは、稼ぎ手とケアの担い手が入れ替わることもできるような、行ったり来たりが可能なところなんです。例えば、「今日のご飯、私は作れない」となった時に、「俺が作っておくよ」みたいな関係があると、やはり便利です。それは性別だけでもないと思います、それこそ、ゲイのカップルの家事分担などです。あるいは、父子家庭で育児を頑張っているお父さんであれば、経済的にも結構響いてくるところがあると思いますが、そういう時に必ずしも、女性が、男性が、とも言えないと思います。ケアをしている誰かを支えるために、時間とエネルギーを使っている人がいたとして、その人の時間とエネルギーはそちらにかなり取られてしまう。そうすると、かなりの時間とエネルギーを仕事に割くことができるであろう、と想定されている働き方とは、やはり親和性がよくない、といえます。

ただ、現在人口が少なくなる中で、女性も前期高齢者も働きましよう、みたいになり、隙間時間でも働ける、などの働き方になってきた時に、女性や高齢者が労働市場に出るという方向性だけでなく、労働市場でメインの働き手となっていた男性も家事労働をすることは相当に入れ替えが可能です。例えば女性が「3日くらい出張で不在にするからやっておいてくれる？」と言った時に、「いいよ」みたいな関係がこれからできていくのでは、とも思います。もし皆がケアをしなくなり、女性もみんな労働市場に出ていってしまえば、残るのは働けない子どもで、そういう子たちが全部家事を担う、みたいなことになるのはあまり良くないですし、アメリカみたいな社会ですと移民が担うことになります。白人女性が労働市場に出ていくようになって、そちらでエネルギーと時間を使って、帰ってきた時に育児や家事の部分を移民がやっていたりする。日本では下手すると、大人のように稼げない子どもがそれをする、みたいになってしまった時に、それは良くないのではないか、と思います。

やはりケアの価値を高めつつ、男性も意味を持ってそのことをやる。そして嶺崎先生がおっしゃった通り、ケアを通して信頼関係や繋がり、絆、愛なども出てくる側面があり、それがあ意味人間の社会を作る大事なところになっているのであれば、「女性は尊いことをやっている」と言うだけでなく、「じゃあ、そういうあなたもやってみたら、ぜひどうでしょうか？」と思います。はっきり言って、そうしないとサステイナブルになれない。SDGs など言うのであれば、子どもを二人ぐらい持つことが普通にできる社会であって欲しいと思いますし、子どもを持つのは贅沢だ、とか、二人持つのはすごいよね、みたいなことはおかしいのではないかと。今のままだと、自分が不利になるから誰も依存者を持ちたくない。そうとなると、結婚しない、子ども持たない、みたいな方向にどんどん加速していきます。そういうことって、どうなの？と強く思っています。

嶺崎：ありがとうございました。今お話を伺っていて、パキスタンの子の通訳ですと文化が違うので、そもそも学校側と通訳して、と言われた時に、親との前提が違うので途方に暮れる、というお話を思い出しました。例えば日本だと運動会は結構大きな行事ですがパキスタンには運動会という文化がないので、運動会に親が来ないのです。（パキスタン人の親から）「子供が体操しているのを観に行つてどうするの」みたいに真顔で聞かれたことがあります。「運動会だったら、私に会わないで運動会に行きなよ」と言うのと「え、なんで」と返され、「じゃあ子供のお弁当はどうするの？」と聞くと「え、お弁当なんか、その辺で食べているんじゃないの？」というような理解の無さで。一方子供は、学校から「どうしたのって聞いてきて」と言われますが、親がそのように運動会に重きを置いていないのを知っているので、何をどう聞けば良いのかが分からなくて困ってしまい、「でも、うちの親は来ませんからいいです」と、通訳そのものを諦めた、みたいな事例を聞きます。やはり子供が異文化なり、違うところや知らない単語などを通訳するのは、すごく大変だなと思いました。

それと、澁谷先生もおっしゃっていた、ケアの価値を高めていきつつ、今までは賃労働の方にばかり偏重していた人たちがケアの方に参入していく、そしてケアの方ばかりをやっていた人たちも入れ替え可能な形にしていくのがサステイナブルな社会だ、というのが本当にその通りだと思いました。ここで難しい

のはグローバル・ケア・チェーンズの問題で、アメリカの場合に移民が担うということでしたが、つまり弱い方にケアがいつてしまうという問題も考えていかなければならないと思いました。

嶺崎：それでは質疑応答に入りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

質問者1：お話を伺って思い出したのが、「自立とは、依存先を増やすことだ」という言葉です。自立とは一人で全部できる個人ではなく、頼れる先がたくさんあることだ、という熊谷晋一郎さんの言葉を聞いてすごく納得がいったことを思い出しました。同時に、私自身の中にある経済的自立へのこだわりの強さにも気づきました。ケアに価値がある、そのように価値観を変えなければいけない、ということはその通りだと思います。しかし一方で経済的自立が、例えば離婚できる状態を生み出し、自立、自由を促しているという現実があると思う時に、いったいその部分のバランスをどのようにとっていけば良いのだろうかということなのです。例えば私は博士号を取得して、次のステップに行くために研究は続けているけれども、その生活を支えているのは夫で、自分は家のことをやりながら研究をしている、という状況です。今、急に一人になったら社会的に物凄く弱い立場になることに対して、まだ自分でも解決を見出せていない。だから、ケアそのものにお金生まれるような社会的システムがなければ実際難しいのではと思います。

澁谷：今の質問者さんのお話は、かつての自分を彷彿とさせるところがあります。博士号を取ったけれどその後、子ども二人もいて「さあどうしよう」というような。保育園に預けてまで自分のやっている研究は意味があるのか、研究とはわがままなのか、趣味なのか、みたいになってきて、これは仕事に繋がるのか、と感じてしまった時がありました。ただ、そのあと就職してみると凄く楽になりました。やはり就職すると、自分が何をしているのかが、自分自身に対しても周りに対してもはっきりするからです。ケアの部分は言語化できないことが多く、例えば「兄弟喧嘩の仲裁をした」をどうやって説明すれば良いのだろう、となるわけです。他方で、大学に行って会議に出ました、授業しました、と言うと本当にわかりやすい枠があって、それに対する対価みたいなものも入ってきて、意味をちゃんと見出しやすいところがあります。やはりそういう意味ですと、さらにお金がついてくる、ということで、これは凄く大事だと私は思っています。

では、ケアに対してお金をつけていくのがいいのか。実際、介護者給付みたいな話があります。介護をしている人に対するお金を出す。しかしそれは、どんどん固定化して行くのではないかという気持ちもあります。「お金をもらっているのだから、やって当然」のように、ケアが際限なく増えていくような状況になりそうな気もしています。やはり私は、その時にケアを分担できる担い手が何人かいるとよかったのではないかと、思います。保育園かもしれませんし、親戚かもしれません、あるいは夫かもしれません。でも、余裕がないと男の人でもケアできない、というところもあります。若いとキャリアを作ることに結構必死になっているところもあるので、ケアの大事さ、などと言っても響かない部分もあるかもしれません。

ケアにお金をつけていくことも、どうしても必要な時はそうするとして、社会的に分業を促進していくという目的のためには違う方法もあると思います。私は全ての人が、男性も社長も全部含めてケアを担う、ということを織り込んでいかないと、と思っています。どんな人間でも、人生のうち30年くらいはケアを必要とするのが人間の生き方です。大体生まれてから20歳くらいまでは誰かに面倒を見てもらって、最後死ぬ時、平均寿命より健康寿命は10年短いので、やはり10年は誰かのお世話になります。人生80年生きるとして、そのうち30年はケアを必要とするのが人間の生き方なのであれば、どんな人だってケアをするということを織り込んだ社会での働き方や社会との関わり方ができるようにしていないと、おかしいのではないかと思います。

嶺崎：私が補足するとすれば、男性の方の、稼ぎ手であることへのこだわりから離れる、みたいなことも大事だと思っています。うちは夫も研究職を目指していましたが、どちらかが就職したらそこについていく、という約束をしていました。私の方が結果的に早く、愛知の方に就職が決まったので、夫はどうするのだろうかと思っていたら、「でも約束だったからついていくよ」と言ってついてきて、非常勤などを少しやりながら、でも一時期私の扶養に入ったりもしながらケア労働をしていました。その時に、それ自分の男らしさを傷つけられた、みたいに思う人だったら、もっとずっと大変だったと思います。この時、やはり男らしさとか女らしさとかに拘りすぎると大変なのかもしれないと思いました。自分たちを脱ジェンダー化していくことも方向性として一つ必要である、夫を見ていて思いました。

嶺崎：今チャットで質問をいただいています。「性別役割分業はイスラーム圏でも変化していますので、ステレオタイプにとらえない方が良い気がします」。それはおっしゃる通りです。「ハウスメイドが雇える階層の女性は、男性並みに自立しています。女性（の社会）進出も日本よりも遥かに進んでいる感じです」。

そういうところでグローバル・ケア・チェーンズの話が出てきて、余裕がある人はもっと余裕のない女性たちを雇って、その人たちに家の中のケア労働を任せることによって社会進出をしていく、という形になります。例えばシンガポールなどへ、家事などをする移住労働者としてフィリピンなどから来ている人たちは、そこで仕事として他の人の子供を見ているわけですが、その人たちが置いてきたフィリピンでの子供は、出稼ぎに行かない自分の親や、自分の従兄弟などの人たちがさらに見ている、という形でケアが連鎖していく。こうした問題を見ていかなければいけない気がしています。

もう一つ質問を読みます。「ケアを誰もがすることが当たり前になるというのは本当に理想的だとは思いますが。日本の現状では、最近性別に関わらず、具体的には男性でも保育や介護の職への参入が進んでいるように見えるのですが、問題の一つは、例えばこうした職業の金銭的な見返り、給料が低く見積もられていることではないかという印象があります。この辺りについては、どのようにお考えでしょうか。」確かに、ジェンダー化されている、女性の職業とされているようなものは大変給料が低く、専門性の割に給料が低いというのは、ずっと言われてきています。

澁谷：こうした職業の給料は上げていくべきだと思います。そもそも、価格設定の時に「これまで女性が家でやっていたらタダだったのに、外でするとそこに払う」という発想があります。でも凄く高すぎると、若い世代、子育てをしている世代はそれを使えなかったりすることもあるのでは、とも思います。

やはり社会の仕組みが必要ではないでしょうか。例えば保育園への助成など、こちらが負担するよりももっと実際はお金が出て、保育士さんが生活していく時には無理をしなくても大丈夫で、男性であっても保育士や介護士などになれるような仕組みです。凄く専門性が高く、やりがいのある仕事であるのに、経済的に不安定すぎて辞めていかざるを得ない、という人たちもいるみたいですので。そこは、ディーセントワークという考え方で、真っ当な、ちゃんと生活していけるだけの賃金体系の仕事を作っていかなければならないのに、どうしてもケアがタダだった時代との比較の中でそれを作っていく。これはケアを利用する側にも言えることかもしれませんが、ケアということを全部組み込んで社会を作っていくとするならば、ケアに関わることを職業としている人たちへの高い敬意、そしてそれへの見返りとしての賃金面での安定性などにも、本当は反映させていかなくてはいけない。そしてそれを若い世代が払えないのであれば、そこにサポートするようなことが必要だと個人的には思っています。

嶺崎：最後にもう一つコメントが来ています。「やはり稼得信仰を捨てなければいけない時が来た、と思いつきながら話を聞いています。今の社会の問題が可視化される場所としてのジェンダーであると思いました」。

経済的な所得という意味では、もう労働と乖離しているような気もするのに、これだけ仕事が重視されるのは、ダブルスタンダードだと思います」。…「経済的な所得という意味では、もう労働と乖離している」というところ、少し説明していただいてもよろしいですか。

質問者2：所得と労働というものが、実際はこれだけ分かれてきている。資本を持つ人だけが資本を得ることができる、という構造を生きさせられていると思うのです。それなのに、どんなに働いても真っ当な資本を得られないことが前提となっているような労働をしないと人でもいられない、というような。今のこの経済構造がこんなにおかしいのに、その中でやっていかなければいけないことが第一の条件になって、そこで労働が存在条件になっていて、と考えてしまうと、やはり子育てをしたり大事な人が大変な時に手を差し伸べたりする余裕は、どこをどう探してもないのではと思います。これは男の人もやればいいのか、たとえば、きっとそれだけでもなく、本当に「ガラガラポン」したい、みたいなことを考えながら聞いていました。どのようにそれを思われますか。もう労働としてケアを見ることすら、やはり問題があるのではないか、それはもうケアに失礼ではないか、ということです。

澁谷：資本主義がここまで進んでいくと、資本が資本を産む、というところがあります。必ずしも労働でなくても、所得が得られる場合もありますが、資本がない人は、自分の体や時間などを使って労働してお金を得ていかなければいけない、というような状況があります。やはりこうした構造が進み過ぎていて、なぜ？というところがあります。

さらにもう少し言うと、色々なサービスをお金で買う、例えば携帯の通信あるいは入院や医療などもそうかもしれませんが、どんどん分業化が進んで高度になっていき、それをお金で買う、というような世の中になっていると思います。このように、なぜこんなにお金が必要になって働かなければいけないのだろう、と思った時、例えばかなりの人は子どもの塾代を稼ぐためにパートなどしたりして、教育がそこまでお金がかかるものになった結果、子どもを持つことのハードルも高くなった時に、やはり「ガラガラポン」したいというのはよく分かります。教育費ゼロにしてもらいたい、など色々思うところはありますよね。男とか女とか言っていられず、お金がないと凄く選択肢が狭くなってしまうという社会のあり方自体が凄く窮屈だな、とも思います。

お金だけでなく、時間や体力、繋がりというのも、いわゆる資本ではないですか。文化資本とか、自由になる時間とか。そういうところも含めて、やはり少し考える時期が来ているのではないかと思います。繋がるためには繋ぎのメンテナンスが必要ですが、今のままだとそれにかける時間やエネルギーが全部賃労働に取られて孤独が増し、「助けて」とか「サポートお願い」という関係すらなくなってしまう。こんなことが目指されている社会なのだろうか、と思うと、やはり少し違うと思います。急な「ガラガラポン」と言うと、じゃあ革命起こすか、みたいで、それは少し現実的ではないのかもしれませんが、でもやはり、変だなということは事あるごとに言っていきたいです。

まず私が今やろうとしているところは、ケアする人のケアというところなんです。女性が担っている分にはそこまで問題にならなかったかもしれませんが、子どもまでがそれを担うとなると、さすがに問題だと見なされる時代になっています。そうであれば、それはどういう事なのか。人生の中で絶対必要なケアの部分を度外視した働き方ができあがっていること自体がおかしいのですか、ということを実あるごとに言うことで、少しずつ変えていくしかないと思います。資本が不平等に存在していて、それを仕組みによってどのように変えていくか。今ひとり親の支援などと言われていますけれども、やはりこんなにも個人が時間も体力も犠牲にして抱えこまなくてははいけない、ということ自体がおかしいのではないかと。労働すらしないで優雅にしている人もいて、「不公平じゃない、世の中？」みたいになってくると、色々な信頼関係が壊れていくと思います。そういう意味でやはり、「ガラガラポン」したいというのは凄くよく分かりますし、「ガラガラポン」まで行かないかもしれないけれど、できることはできる範囲で、ちゃんとやれ

るところはやっていきたいと強く思いました。

嶺崎：本日はお忙しい中お時間いただきましてどうもありがとうございました。澁谷先生も本当に突然お願いしたのに、ありがとうございました。

澁谷：こちらこそ、ありがとうございました。